

# AKIRA FIRE

2017年（平成29年）4月24日(月)発行

発行 川越東高等学校新聞文芸部

## KTNP SCIENCE

KTNPからのお知らせ

新聞文芸部はKTNPオンラインサービスの一環として、ホームページを設立しました。NEW S&TOPICSが便利！「川越東新聞文芸部」で検索！（http://www3.hp-ez.com/hp/kawatonnnp）

第124号



内覧会に先駆け、国立科学博物館長や大英自然史博物館長らがテープカットを行った（3月17日、国立科学博物館で）＝橋本撮影

# 自然史の至宝 上野集結

## 大英自然史博物館展

東京都台東区の国立科学博物館で、6月11日まで大英自然史博物館展が開催されている。新聞文芸部は同展に先駆け、3月17日に行われた報道陣向け内覧会に出席し、展示に関して取材を行った。大英自然史博物館にとって初めての国外巡回展となる今回は、同館のコレクションから初来日となる始祖鳥ロンドン標本をはじめ、厳選された約370点が展示される。ぜひ、今度の大型連休に訪れてみてはいかがだろうか。

（濱渡）



鹿児島県に落下し、ロンドンに渡った薩摩隕石の標本

## ロンドンからの帰還

展示品の中には日本で採取され、ロンドンに渡った標本もある。

例えば、写真の薩摩隕石（国際名称では九州隕石）は小さな欠片こそ日本にあるものの、25キログラム以上の重さを持つもっとも大きな欠片は明治時代に購入され、そこから100年以上ロンドンで

この大英自然史博物館展は大英自然史博物館から国立科学博物館へ3年ほど前に提案されスタートしたものである。同展のテーマについて国立科学博物館の篠田謙一副館長は「自然史の博物館の過去と現在と未来」と話し、その言葉通り展示は導入部分となる序章から始まり、自然史博物館

の成り立ちについて説明した第1章から、今までの標本などを求めた冒険の歴史などを経て、自然史博物館のこれからについて説明した第5章までの6つの章で構成されている。同展では大英自然史博物館のコレクション約8000万点から厳選された約370点が来日する。このうち、ロンドンで常設展示されているのはわずか17点で、特別な機会で見られることのできない「至宝」を間近で見ることが出来る。展示品の主な例として、この展示により初めて日本に来ることとなった始祖鳥

のロンドン標本や、進化論を提唱し、当時大きな話題を呼んだチャールズ・ダーウィンの「種の起源」の直筆原稿、1886年に鹿児島県に落下し、その後標本としてロンドンに渡った薩摩隕石（九州隕石）などがある。

今回の展示について篠田謙一副館長は「今の自然史博物館というのが何を目指しているのか、来ていただきたい人たちに考えてもらう、という構造になっている」と話した。

〈料金〉  
一般・大学生は1600円  
小・中・高校生は500円  
※展示は6月11日まで

保管されており、今回初めて日本に帰還し、展示される。他にも1741年に佐賀県に落下し、同じく明治時代にロンドンに渡った小城隕石や、愛媛県西条市の市之川鉱山（現在は閉山）で採取された輝安鉱、かつて日本沿岸に生息し、現在では既に絶滅した可能性が高いニホンアシカの標本など、日本からロンドンに渡った標本も数多く日本への「里帰り」を果たしている。

# 思い込みが生んだ大事件

## QUEST ～探求～

### ピルトダウン人



ピルトダウン人の捏造標本（下はレプリカ）

思い込みが自然史に大きな間違いを残してしまうこともある。左は科学史上最も悪名高い捏造事件として知られるピルトダウン人の標本である。この標本が現れた1912年、

論理として今の人類が類人猿から進化したことは分かっていたものの、進化の途中となる姿がまだ分かっていなかった。そこに類人猿に似たオランダ人の顎と現代人のような大きい頭部を持ったピルトダウン人が現れたことで、当時類人猿は知能が高くなっていた、つまり脳が大きく発達した猿だと思いついていた科学者たちがこの標本を「類人猿と人類を繋ぐ失われた環」であると宣言した。しかし、その後ジャワ原人など、人類の祖先と思われる、猿のような頭部と人間のような顎を持つ化石が多く見つかり、再調査

の結果ピルトダウン人が捏造であると発覚した。篠田謙一副館長は「誤った思い込みに沿ったものが現れると、それに騙されてしまうという例である。しかし、当時の最新の技術を使って嘘を暴くのも科学である、ということを考えてほしい」と話す。嘘と分かっていても捨てられずに残ったこの標本を一度見に来てほしい。

## 過去5回の大絶滅 現在も

地球上の生物は今までに5回の大絶滅を経験しているという。大絶滅のきっかけとな

大英自然史博物館はその名の通り、大英博物館から分かれて生まれた博物館です。ロンドンのサウス・ケンジントンにあり、自然史の博物館としては世界最大級の規模を持っています。その成り立ちは1753年に上流階級の医師だったハンズ・スローン卿の個人コレクション



シヨンが政府に送られたことから始まり、資料や標本が膨大な量に増えてきたことを受け、19世紀後半に「恐竜」という言葉を生み出したことで知られる、リチャード・オーウェンによって大英博物館から分離し、誕生しました。興味を持った方は、一度ロンドンに訪れてはいかがでしょうか。

## 始祖鳥 ついに初来日

始祖鳥とは今から約1億4700万年前に生息していた体長約5センチほどの動物で、1860年にドイツで初めて化石が発見された。今回展示されているのは「恐竜」とい



始祖鳥のロンドン標本

う言葉を生み出したことで知られるリチャード・オーウェンが1863年に発表したロンドン標本である。始祖鳥は羽毛や翼が備わっていることから、最古の鳥類化石とされていると同時に、歯やカギツメ、骨で出来た長い尾などの恐竜の特徴も併せ持っており、恐竜と鳥類が進化的につながっていたことを示している。このことはダーウィンの「種の起源」でも触れられており、

またダーウィンの支持者であったトーマス・ハクスレーは、1868年に始祖鳥によって恐竜と鳥類が進化的につながっていたことを提案し、そこからこの始祖鳥が進化論の議論の中心的存在となった。現在でも、この始祖鳥が鳥類なのか、恐竜なのか、鳥のように飛ぶことができたのか、できなかったのかは未だに判明していない。真実は何なのかを思っ見てほしい。



▶オオナマケモノの標本

るのは、例えば左のオオナマケモノのように氷河期といった自然現象が挙げられるが、今まさに6回目の大絶滅が人間の手で進んでいる、という説もある。この展示について川田伸一郎研究主幹（動物研究部 脊椎動物研究グループ）は「例えば広い陸を持つオーストラリアでは、固有の生態系が出来上がっていたが、人類が進出して羊といった家畜を育てるようになると、人類の邪魔をする肉食動物がどんどん殺されてしまったということがある。また200年ほど前までは、主に北アメリカ大陸で空を埋め尽くすほど生息していたリョコウバトも、羽毛を狙った乱獲や、開発による住居の減少により絶滅していった。この歴史を見て、我々はこれからどう生きるべきなのか、ということを考える、いい機会にしてほしい」と話した。（おわり）